



藤井先生の思い出

私にとって の藤井さん

森 豊 吉

先生に近づき親しくしていただいた記憶の始まりは、私の30歳頃である。だから、先生は35歳であられたはずであって、大震災のあった大正12年の頃である。

当時、先生はあの有名な牧彦七博士の部下として、明治神宮外苑造営の計画設計施工に當っておられた。その年、私はアスファルト舗装の研究のために、日本石油会社から米国へ派遣された。その帰りに、日本へのお土産として、ワービット舗装を持ち帰ったのであった。

たしか翌々年の大正14年に、外苑の道路舗装工事の入札が出た。それには神戸鈴木商店のトリニダットアスファルト舗装と、このワービットとの二つが選ばれて入札に参加し、その結果、日本石油会社に落札し、現在日本舗道KKの社長である名須川君が現場主任となった。今から考えると、トリニダットとワービットとが同列に入札したのであるから突飛なことであった。仕様書も今のように画一的ではなく、神宮外苑造営の意義とそれともなう目的とが長々と書き記されてあって「工事はすべてこの目的を成就すべく努力、施工せよ」という意味の言葉で尽きていて、「詳細なことは請負施工当事者の技術的良心に俟つ」というようなものであった。責任施工がやかましく論ぜられている昨今、すでに40年前にかかる仕様書で入札に付し、その仕様書の下に施工したアスファルト舗装が今もなお役に立っているのを見ると、私にとって感慨無量なものがあるのは否めない。

この工事には、ワーレン会社から工事施工にボールス、試験設計にシューメーカーの両技師がきていて、最初は、基礎はテールホードの設計であった。しかし実施に移してみると、何分関東ロームの上であるから、施工中の雨にたたられて良くできしらなかつた。そこでおそるおそる先生に設計変更をお願いしたら、即座にセメントコンクリートに変更して下さった。設計者としての先生の立場は、ずいぶん辛かつたらうと推察されるのであるが、その場限りの便宜からではなく、技術的良心に忠実で、神宮造営の目的にそうという見地から決断されたことに対し、いまさらのように敬服せざるを得ないのである。もしその設計変更がされなかつたならば、今頃まで外苑道路は満足であり得たであつたらう。

私が発明したセメントマカダミックスもまた、藤井

先生に負うところが多かつた。戦争中のある正月、20日過ぎてお年賀に海軍施設本部の第三部長室に伺って、風邪のためにお年賀の遅れたお詫びを申し上げたら、「君は戦争中に風邪を引く余裕があって良いなあ」と答えられた。その当時は、このお言葉を素直に受けとることができなかつたが、後に先生の責任感の強さをあらわした言葉であつたのに思い當って、ますます先生の偉大さに打たれたのである。また、ある機会に、セメント舗装はなぜクラックが入るかと質問したところ、水の代りに他のある物を加えることが発明されたら、クラックは少なくなるであろうと答えられた。そこでまた、どんな本を読めばよいかと質問したら、本は本当のことを教えないし、人はうそをいうと答えられた。そこでさらに、しからは、どうしたらよいかと質問すると「その物に問え」と答えられた。そこでコンクリートの発明当時の古本を私は探し始めた。その後、エブラムス氏の粒度率説を知って、また先生にそのことを話すと、先生の著書「土木材料」の中に紹介してあると言われたので、古本屋を探し回ったがむなしかつた。そこで失礼とは思つたが先生にお願いしたら、だいぶ痛んだ一冊を与えられた。ところが、その本の表紙に短冊型の張り紙が貼ってある。そっとこれをはがしてみると、そこには「妻富美子へ捧ぐ 真透」と書いてあつた。今でも私はこの本を身近かに持っている。

この本のお蔭でセメントコンクリートの根本原理を識ることができ、それがセメントマカダミックスの発明となり骨材中心の内部摩擦力を最大に利用することこそ、アスファルト道といわず、セメント道といわず、砂利道といわず、その“骨”であることを悟ることができたのである。あの青山の葬儀の席で、日大の道路研究会の学生代表が、先生は単に学問上のみでなく、われわれにとって精神完成の大先生であつたことを弔辞に述べられ、私もこれに共鳴して、思わず眼頭が熱くなつたのであつた。(筆者：正員 日本道路建設業協会会長)

暖かい藤井先生

成瀬勝武

藤井真透先生が日本大学工学部（現在は理工学部）に始めてご関係になられたのは、昭和5年4月、土木工学科の第1回学生が第2年を迎えて、先生に道路の講義をして頂くことになった時のことであつた。普通の大学では道路工学は単一の学科になっていたのに反して日大では、道路の重要性にかんがみて道路工学の理論ならびに

実際に拡充するために、道路工学に2倍の時間をとって、道路工学第1(岩沢忠恭先生ご担当)と道路工学第2(藤井真透先生ご担当)とに分けられた。道路工学第2は言葉をかえていえば街路工学であって、その内容は舗装が半分以上を占めていた。このことは、舗装がもたら都市の街路とその周辺の道路に普及されつつあった当時の日本の道路をよく現わしている。

藤井先生は毎週2時間ずつ講義をされた。あるときはカバンに、あるときは大包みの風呂敷に講義の資料を入れられていた。そして、講義の前やその後で私達と雑談を交えられた。先生とお話をしている間は、われわれの部屋は別世界に移ったような調子で、春風駘蕩の暖いのだかさがみなぎり、険悪な世相から絶縁されていた。今でも私の眼底に残っているのは、あの温かな瞳、ゆうゆうとして迫らないあのしゃべり方である。

先生は博識家であって、学問技術にきわめて該博であったことは先生を知っている人々の一様に驚くところである。ある問題をおたずねしていると、明快なご教示を得られたが、その中にいろいろの註釈がつき、その註釈にまた説明が加わってくるようになってくると、頭の中の組織力が弱い私などはもういっぺん復習の質問で先生を悩ますことがあった。すでにこのように物事を広く深くご存知であることは先生の博覧強記を意味しているのであるが、先生にはいつなん時で手帳にメモをお書き

になる慣習があった。これはその場合場合でかく日記的記録でもあって、現に日大病院でご逝去なさったとき、その直前までのメモが残されていた由をきいた私は、一口に「まめ」とか「こまめ」とかいう努力ではなく、先生は偉大なエネルギーの所有者であられたことを痛感した。

日米開戦と前後して先生は海軍の方に関係されたので日大との10年におよぶ長い関係は切れたが、昭和28年日大理工学部の大学院では道路担当の教授として再び先生をお迎えすることになった。昭和10年頃の一学級の学生数は50~70名であって、決して少ない方ではないにもかかわらず先生は学生の1人1人の面倒をよくみられて、学生に慕われていたのであったが、今度の大学院のほうは学生が前の1/10もないから、師弟の関係はますます深さを加え、道路研究会によってその絆は強められ、青山斎場の告別式に際しても会の幹事の哀悼の言葉に、「今や私たちは慈父を失ったのと同じ感に泣くのである」という言葉を述べていたが、それはまさしくその通りであった。

日大理工学部土木工学科初期の諸先生は、茂庭先生、山口昇先生、佐藤利恭先生、三浦七郎先生その他の諸先生がご逝去されているのに加えて、今、藤井真透先生とお別れることになった。ああ、何と哀しいことではないか、追憶申し上げて、謹んで故先生のご冥福をお祈り申し上げます。(筆者:正員 日本大学教授)

設計・施工に必備のコンサルタント 諸家賞讃
成瀬勝武・谷藤正三・沼田政矩・種谷実 監修

土木施工データブック 第2版出来

B5判 1162頁 豪華本 定価 4800円 千160円

〔主要項目名〕 計画測量・工事測量/仮設工事/土工・土木機械/地盤改良工法/基礎工法/プレキャストコンクリート工/プレストレストコンクリート工/鋼橋・鋼構造物の製作・架設/電気防食法/道路工事/軌道布設・保線工事/地下鉄工事/河川工事/砂防工事/港湾・海岸工事/ダム・発電水力工事/トンネル工事/上水道工事/下水道工事/防水工事/工事管理/付録/資料

成瀬勝武・本間仁・谷藤正三監修

土木設計データブック 好評11版

B5判 776頁 豪華本 定価 4000円 千160円

〔主要項目名〕 構造力学/鋼橋・鋼構造/木橋/コンクリート/鉄筋コンクリート/PSコンクリート/土質力学/基礎工/土工/道路/空港/鉄道/水理/河川/水力・ダム/港湾・海岸/上水道/下水道/都市計画/土地改良/付録/資料

森北出版株式会社

東京・神田・小川町3丁目10番地
振替東京 34757 電 (291) 2616・3068